HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヨシヤの改革 ：「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙橋, 優子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13833号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78685
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Takahashi_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　髙　橋　優　子

主査　教　授　佐々木　　啓
審査委員　副査　准教授　宮　嶋　俊　一
副査　准教授　戸　田　　聡
副査　教　授　渡　辺　和　子（東洋英和女学院大学）

学位論文題名
ヨシヤの改革：「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文で達成された研究成果として，以下の三点をあげることができる。

第一は，「エサルハドン王位継承誓約文書」（Esarhaddon's Succession Oath Documents; ESOD と略記される）が「ヨシヤの改革」の綱領である「申命記」に文献として直接影響を与えた蓋然性の高さを示したことである。両者の間に類似があることは早くから認識されており（Wiseman, Weinfeld），これについて 1987 年に，審査委員の一人である渡辺和子が，類似の理由は ESOD が誓約を担保させるために近隣領域の様々な文化における「呪い」を収集したからである，という説明を与えていた。2012 年に ESOD のタイナト版が出版されると，ESOD と申命記の関係をどのように理解すべきか議論が紛糾するようになった。両者の類似は今や前提とされるが，その類似の原因が古代西アジア世界に共有されていた伝統を反映しているだけといった消極的なものなのか（Crouch, Quick），そうではなく ESOD から直接に影響を受けているといった積極的なものなのか，ということが論争となっている。事実上両者の積極的な影響を前提としている研究者が多いとはいえ，そのことを何らかの方法で証拠だてる試みはまだ為されていなかった。本論文は，旧約聖書文書間の引用の際に用いられるユダの書記のレトリックのひとつである「交差的引用」を指標とし，（単語や文，文章などに表わされた思想）内容の起源ではなく，テクストの引用関係を判断することを提案している。「交差的引用」というレトリック自体は以前から知られていたが（Seidel, Beentjes, Levinson），その現象の意味するところについて，ESOD と「申命記」の類似する箇所を網羅的に比較検討した上で論じた点に，本研究の成果がある。

第二に，「ヨシヤの改革」前後の歴史的諸段階，すなわち，唯一神教への発展の諸段階，「申命記」の編集の諸段階，さらにそれらに加えてユダ王国における王権観の変遷を，相互に関連するものとして整合的に把握していることである。

第三に，現在まで続く唯一神教への発展の起点として「ヨシヤの改革」を捉えようと試みていることである。世代を超えた「永遠の誓約」という ESOD の観念を，ユダ王国の生き残りのために役立つものと改革者たちは考え，それを「申命記」に受容したことにより，当事者の意図を超えて，この「ヨシヤの改革」は宗教史的・思想史的に重要な転期となったと見做しているのである。そういった ESOD の概念装置を用いて，「申命記」史家たちは神ヤハウェと民イスラエルとの「永遠の誓約」を創作し，かつ「呪いのリスト」をもってそれを担保しようとしたのだというのである。ヤハウェは死なないが，民は当然死ぬ。しかし，申命記 6 章では，子々孫々まで誓約を（「この律法の言葉を」）教育し継承するようにと命じられており，個人は死んでも誓約が維持されるようになっていたというのは，まさしく ESOD の目指すところである。このような観点からしても，ESOD がいわゆる「アブラハムの諸宗教」そのものに多大な影響を与えたことは明白ではないか，というのが本論文の革新的なテーゼである。

しかしながら，本論文にもいくつか問題点のあることが口頭試問において確認された。「交差的配列」というレトリックを用いて「申命記」が ESOD を直接引用したという仮説については，そのこ

とが両文書間の直接引用を証拠立てるのに必要にして十分なものであるかという疑義が出された。今後はこの直接引用仮説をさらに補強する論証が必要であろう。また，ESOD の「永遠の誓約」という観念が「申命記」に取り込まれているという考えは，本論文の執筆者髙橋氏のよりマクロな視点からの論点であることが口頭試問において確認されたが，本論文において十分議論が展開されているとは言い難い。この「永遠の誓約」という ESOD の思想や，その「申命記」への取り込みという議論については，本論文の叙述の中でさまざまな新たな切り口が示唆されていると積極的な指摘も口頭試問ではなされたが，執筆者本人が十分それらを意識しておらず，議論が不徹底であることは否めない。

しかしながら，上述のような問題点は，本論文において達成された成果を損なうものではなく，むしろ，本論文で提示された斬新な仮説をさらに展開すべき可能性を示すものでもあるということができる。

・学位授与に関する委員会の所見

以上の審査結果から，本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。